全部この会社の社員とし、先生自らその社長となって経営した。後にこの社は発展して「帝国通信社」となった。

しかしながら今まで述べてきた様々の改革にもましてわが新聞界に生気を吹きこみ、溌剌たる新鮮味をみなぎらしたのは、龍渓先生の論説であった。帝政三年の新知識を傾け、明快にして典雅な独得な文章で、高く世界的な視野からあらゆる問題を鋭く論及して、読む人の眼を見ひらかさずにはおかなかった。また一方、政米の興味深い文芸を翻訳して、大衆の読物として喝采を博した。

当時に於ける龍渓先生の論説は、すべて世の人を指導し啓発するものであったが、就中かのシベリヤ鉄道計画を論評した一文などは、殊に世人の脳裡に深くやきつけるものがあった。その頃の大多数の日本人には、ロシヤは東洋に縁のない遥か遠い涯にある国のように思われていたが、先生はこのロシヤが今計画をすすめているシベリヤ鉄道は、将来必ず極東に大きな禍因となるであろうと、声を大にして警告したのである。スタンブールを奪わんとして果たさず、ペルシヤ湾を襲うて失敗し、大洋への進出口を求めて輾転反側、長い間苦んでいたロシヤは、遂に極東にその魔手を伸ばして野望を遂げんとしていることを喝破し、必ず遠からずシベリヤ鉄道を敷設するであろうと説いた。そしてその鉄道が完成した暁には、ロシヤは潮の如く極東に押し寄せ、満蒙の曠野は彼らの勢力範囲に帰してしまうであろうと、ロシヤの東進政策を論じたのである。

先生が喝破した通り、一八九九年（明治三十二年）にシベリヤ鉄道は全線開通し、翌年勃発した北清事変に乗じて満洲を占領し、なお侵略の手は朝鮮の北部に及ぼそうとするに至り、遂に日露戦争の起る原因となった。

この「シベリヤ鉄道論」は無論一例としてあげた論説の片鱗に過ぎないが、先生の論説は国民の眼を海外に注げようとするものが多かった。

先生が、いつも人より一歩、いや数歩先んじて世人を指導し啓蒙したことには全く頭が下がる。まことに一大先覚者たるの面目躍如たるものがあった。（この項おわり）

研究

佐伯城絵図解説 一

会員　小野英治

本図（次頁）は、元日本陸軍築城本部で蒐集したものを、当時築城本部勤務の山中光久元大佐が、ノートに書き写しておいたものである。

現在、原図の所在は不明であるが、恐らく東京空襲の際、焼失しているものではないかと思われる。しかし、この原図も築城本部の所蔵となる以前は、佐伯に伝来していたものであった。

明治三十二年四月四日から六日にかけて、毛利高政公入部三百年を記念して、佐伯開市三百年祭が行なわれているが、その会場の一つであった旧城三ノ丸御殿に、『佐伯城市見取図』として展示されていたのがこの原図であり、その時撮影した写真を佐伯市勝の高野喜助氏が所蔵されているが、原図のない今日、貴重な写真となっている。

この原図写真から見れば、約六尺四方とも思える大きな図面で、城と城下町が詳細に記されている。私の知る限りでは、佐伯城と城下町を詳細に描いたものは他に

豊後佐伯城の図（元文年間）

日本城郭資料館資料より

（S.44.8 西ヶ谷恭弘氏提供による）

い（城と城下町を別々に描いたものはある）と思われるだけに、なにぶんにも小さな写真からでは詳細な判読が困難であり、原図の紛失が惜しまれてならない。

さて中山氏がノートに写した図（上掲）であるが、これは山城部分のみ、日本城郭全集（新人物往来社刊）第十三巻、二四六ページに収められているが、年号が天文三年となっているが、これは勿論誤りで、元文三年（一七三八）が正しい。

この図は、原図写真と比較すればよくわかることであるが、忠実に写したものでなく略図であるから、誤りが少なくない。例えば佐伯城の二重櫓は五基が正しいが、十三基も書かれている。しかし、一応当時の佐伯城の概要を知る事が出来よう。特に二ノ丸御殿については、写真と酷似しており、二ノ丸御殿の外観を知る上で唯一の貴重なものであるといえよう。

（おわり）

（編集者そえ書）

上掲の佐伯城の図は、解説にあるとおり、山中元大佐がノートに写した略図を、西ヶ谷氏が提供して下さったもの、それを更に複写（またうつし）したものであるから細部では多少うつしちがいもあるし、原図とちがった感じのものになったかと思われるが、御寛恕をねがいたい。

しかし二重櫓、平櫓、渡櫓、冠木門などについては、懐重に写してあるものなぞを期した。筆者が指摘しているように、二重櫓が十三基も書かれているが、この誤りは誤りとして鶴屋城の在りし日の姿をじつくりと見ていただきたい。